

ラジオ・ニュームンバイ

週刊 座、グレート・リーダーズ通信

『インド私録-思い切り取り組んだこの 50 年-』 No.30

感謝!

最終回・公開収録は無事終了

昨年 11 月 30 日(火)、「座、グレート・リーダーズ」『インド私録』の第 30 回放送を公開収録で行いました。平日午後という時間帯にも関わらず、9 名の熱心なリスナーにご参加いただき、約 2 時間に亘った収録では活発な質疑応答も行われ、熱気のうちに『インド私録』は幕を下ろすことができました。今回はそのご報告です。

番組は第 1 部がいつも通り白水和憲氏との対談、第 2 部が参加者との質疑応答となりました。

第 1 部 これだけは言っておきたい ① インド理解が進まない理由

第 30 回放送は、朗読部分は「インドに刺激され続けての半世紀—あとがき」でしたので、トークも「あとがき」らしく武藤氏がこれだけは言っておきたいということを中心に語っていただきました。

その 1 つは、日印相互の理解が進まないことへの懸念。武藤氏は、日本人がインドとインド人についてステレオタイプでしか知らないことを遺憾であるとし、そうなった原因を 3 つ挙げました。1 つにはインドは天竺として中国



公開収録の風景@ラジオ・ニュームンバイ(汐留)。対談をする武藤友治氏(右奥)と白水和憲氏(中央奥)。参加者は 9 名。メディア関係者、編集者、中小製造業の海外支援開拓支援事業者、元家電メーカー関係者など、多方面からインドに関心の高い方々が集結。

を介して日本人に知られていたが、そもそも日本がインドと直接的に関わったのは第二次大戦後のことであり、したがって真の日印関係はたかたが半世紀前に始まったのであり、そんな短い間に互いを完全に理解するのは無理であったということ、2 つ目は日本におけるインドに関する報道がバランスを欠いていたこと。

後者については、1991 年に経済自由化を決めたインドへの日本の投資が進まなかったのは、「日本でのインドの報道というと、災害か政治家の暗殺といった暗いニュースばかりで、経済自由化後

もインドの経済情報があまり報道されなかったからではないか」との白水氏の指摘があり、武藤氏は「それが中国とともに経済発展で注目されるようになると、経済発展ばかりが取り上げられた。ことインドに関する限り、日本の報道はバランスを欠いてきたし、今もそう。ポジティブな関心が高まってきた今こそ、インドが抱えるネガティブな部分も含め、総合的な理解を進めるべきだ」と語りました。

3 つ目の原因は多くの日本人がインド情報を翻訳を通して得ている、そのため情報の取捨選択段階

で日本人は広い視野で情報を取得する機会を逸しているということも指摘。武藤氏は、伝える側の責任としてできるだけ幅広い情報が伝わる体制を整えることが必要だと述べました。

インドに関する理解の浅さは国益にも影響します。武藤氏はこの番組を通じて過去にも何度か指摘してきたように、政治的・軍事的に国際社会に台頭してきた中国をけん制するためにインドと手を組もうという論調に強く異を唱えました。国境問題を抱え、中国を脅威の対象として捉えているインドは、中国に不必要な刺激を与えることは望まない、インド政府が考えるインドにとって重要な国は日本よりも中国であると見るべきだという判断からです。日印関係は、第三国という変数をかませるものではなく、インド自体の重要性から考えるべきだというのが武藤氏の考えです。

第 1 部 これだけは言っておきたい② 核協力には条件が必要だ

もう 1 つ武藤氏が力説した点



は、インドの民生用核施設に対する日本の協力は、あくまでも核兵器不拡散条約(NPT)、包括的核実験禁止条約(CTBT)への署名を条件にするべきだったということです。

しかし、協力の交渉を始めた以上はインドが今後核実験を行った場合、日本の技術協力が軍事施設に転用された場合には即刻協力を中止するとの姿勢を明確にすべきだということです。

第 1 部 これだけは言っておきたい③ 常に好奇心を抱かせる存在

対談の終わりに白水氏が投げかけた質問は、ああ、これが武藤氏だと思わせる述懐を引き出しました。

白水「60 年前、武藤さんが人生で最初に踏んだインドの地はカルカッタでした。そのときワクワクした気持ちがおありだったと思います。今はどうでしょうか」。武藤「インドは私に好奇心を抱かせ続けてきた。80 歳の今もこんなことをやられている幸運がある。インドについて考えていると、終着駅のない列車に延々と乗っている気持ちにさせられるんです」。

第 2 部 多岐に及んだ質疑応答 200 パーセントの主張を

質疑応答の時間では 7 名の方から質問の手が挙がりました。放送でご紹介できなかったものも含め、概要をご紹介します。

Q いい面だけでなく、負の面も伝



えるべきという主張に同感。報道する側としてその際に気をつけるべきことはなにか。(木村義弘氏・インドビジネス研究会 <http://www.indiabiz.jp/>)

A どの国にも外国人から触れられたくない問題はある。インド人は自信家だから、少々ことは論破するだろうが、たとえばカーストについては、あからさまに面と向かって問うのは問題だろう。

Q インド人との交渉はどのようにしたらよいか。中国人に言わせると、インド人はタフネゴシエーターで、八割がペテン師だということだが。(安井照人氏・エミダス・グローバル <http://www.emidasglobal.com/>)

A 世界中にいる華僑がインドには根を張れない。インド人がペテン師だとは言いたくないが、それほどインド人は強力。それは、インド人が主張しなければ自分の存在感を示せない社会に生きているから。いくつもの宗教で縦割りにされ、人口 8 割を占めるヒンドゥー教徒を中心にカーストによって横割りにされている。そういう多様な社会で自分のアイデンティティを確立するには、とにかく主張しなければならない。だから、インド人と交渉する場合には、相

手が200%主張してきたら、自分もそうすればよい。主張すれば尊敬される。また、次の交渉の段階に進む際に、すでに得たものを譲歩してはいけない。

Q 分断社会で携帯電話がある役割を果たしたということですが。(元家電メーカー勤務・男性)

A 例えば、以前は使用人から運転手に指示を伝えていたのが、携帯電話の普及で、旦那が運転手に直接携帯電話で指示するようになったのは進歩。階級を超えて誰とでもつながるようになった。

Q 自分は森鷗外は小説『沈黙の塔』の中で2つの誤解をしていると思う。1つはチョウパティー会館からゾロアスター教徒の沈黙の塔が見えると書かれているが、それは違うと思う。武藤先生はどう思われるか。また、この本には塔にはカラスがいたと書かれているが、ハゲワシであるべきだと思うが、どうか。

インドの国会議事堂の下院の壁にはチャンドラ・ボース、ガンディー、ネルーの3人の肖像画がかけられているというが、それは本当か。また、インドの国会議員にはパルシー(ゾロアスター教徒)はいるか。(NU氏・編集者・ゾロアスター教研究家)

A (沈黙の塔はそこからは)見えない。塔にいるのはハゲワシ。(ハゲワシもいるが、カラスもいるとの参加者からの指摘も)

肖像画は上院と下院の中央にあるセントラルホールにかけられている。3人だけでなく、イン

ド独立に功績のあった主要人物全ての肖像画がかけられている。インド人民党(BJP)が1998年に政権をとった時、マハトマ・ガンディー暗殺に関わったとされるヒンドゥー至上主義者の肖像画も独立に貢献したとして掛けたことで物議を醸した。

パルシーは政治にはあまり関与したがるのではないかと思う。

Q インドが経済自由化をしたにも関わらず、日本からは積極的な投資がなかったということだが、今インドで躍進している韓国勢はその頃どうだったのか。(元コンサルティング会社勤務・女性)

A 韓国は日本よりも速く、組織的に進出していたと思う。(参加者より、「韓国のビジネスモデルは、国民皆兵的なアプローチでプロジェクトをとりに行く」との補足あり)

Q 何年か毎に海外と日本との往復ではご家族は大変だったのではないのでしょうか。(海老原・朗読者)

A それは外交官の宿命。夫婦で赴任というのが鉄則で、その方が相手にも受け入れられやすい。

Q これからインドにビジネスで行くと若者にメッセージを。(西田・インド総研代表)

A インドも都会を中心に生活環境は改善されてきたが、日本と比べるとまだ問題はいろいろあるかと思う。しかし、それに怯まず日本と違う世界を知るという意味で、前向きにインドに関心を持ってほしい。インドが日本にと

ってどのように重要になっていくかは、若い人たちにかかっている。若い人たちにはインドに対する関心を持ち続けてほしい。

藤井酒造「龍勢」抽選会 さて、幸運な当選者は?!

収録の最後に、広島藤井酒造さんの大吟醸酒「龍勢」が当たる抽選会が行われました。当選者は遠路はるばるご参加いただいた、編集者作家NU氏でした。

皆様、ありがとうございました。

次回企画もどうぞ期待

「座、グレート・リーダーズ」はこの『インド私録』の終了でいったん休止いたします。この番組は、昨年6月1日からラジオ・ニュームンバイのホームページにてネットラジオ放送として始まりまして、放送時間は毎週火曜日の夜22時30分からでしたが、全30回の放送は全てこのページにアップされており、いつでも好きなときにお聴きいただけるようになっておりまして、この半年でこのページには32カ国から約1,700人のアクセスがありました。決して多い数字ではありませんが、このうち7割以上の方がなんどもこの番組のページに来てくださっておりますので、真にインドに関心の高い方々と時間と場所を共有できたと考えております。

なお、「座、グレート・リーダーズ」では、次回作品を現在企画中です。是非お楽しみに。それまで皆様、ご機嫌よう!

